電子版市民プレス　第52号

タブロイド地域紙「市民プレス」第52号（2012/4/5発行）の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。
またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

-PAGE 3　志木市の柏町に都市化の波・・・
-PAGE 5　江戸図屏風
-PAGE 9　歴史を繙く：志木市仲町町内会で制作した　仲町の歴史
-PAGE 24　五月の武者飾り
-PAGE 25　惜別：染色家・原　梢美さん

去る3月11日の東北関東大震災でお亡くなりになった方々に対して謹んで哀悼の意を表します。

志木市の柏町に都市化の波・・・

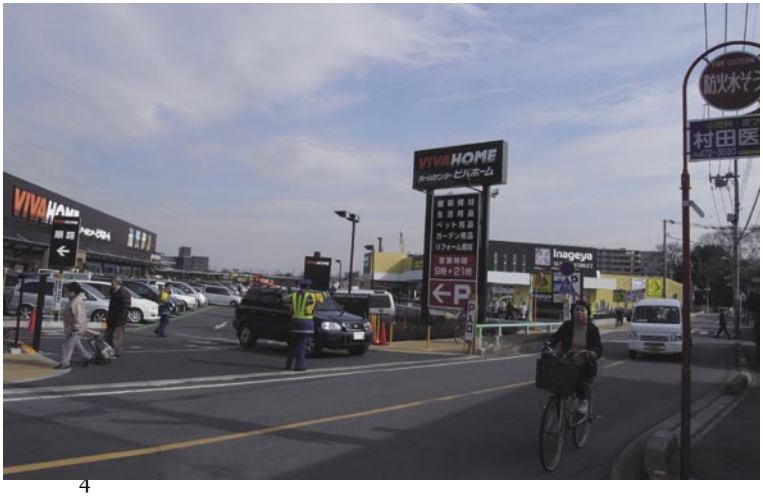
柳瀬川に沿った低地で創業し、新しい医薬品の開発、製造で業績を挙げていた「ワイスレダリー」社が撤収して、すでに三年が経つ。空地のままだった広大な跡地の再開発事業がようやく始まり、その一番手として商業ビルが建築され、二月下旬、二つの大型店舗が一斉にオープンした。

ここは武蔵野台地の縁辺に所在、かつては湧き水が流れて柳瀬川に注ぎ、子供達が魚とりを楽しんだこともある湿地帯で、古き時代から「網師場（あじば）」と呼ばれてきた。工場敷地となってからも何度か水害に襲われたが、その後流域一帯が整備され、いま、生活空間として生まれ変わろうとしている。

大型店には充分な駐車場が準備されたので、来客が一斉に押し寄せても収容できるが、問題は周辺の交通渋滞だ。その隣地では、すでに三百戸余りの高層住宅も着工されているので、来訪する人の流れ、車の流れはどうなるか。

志木市柏町には中世のころ、山内上杉氏の重臣だった大石一族の拠点、「柏城」があったので、古き歴史が残された地域として、また戦後は緑が豊かなハイクラスの住宅地となっていた。

今度開発された商業地区はこれと隣接するので、通行する車両の影響を受けることも予想され、今後は志木市本町大通りの交通渋滞にも及ぶことが懸念されている。

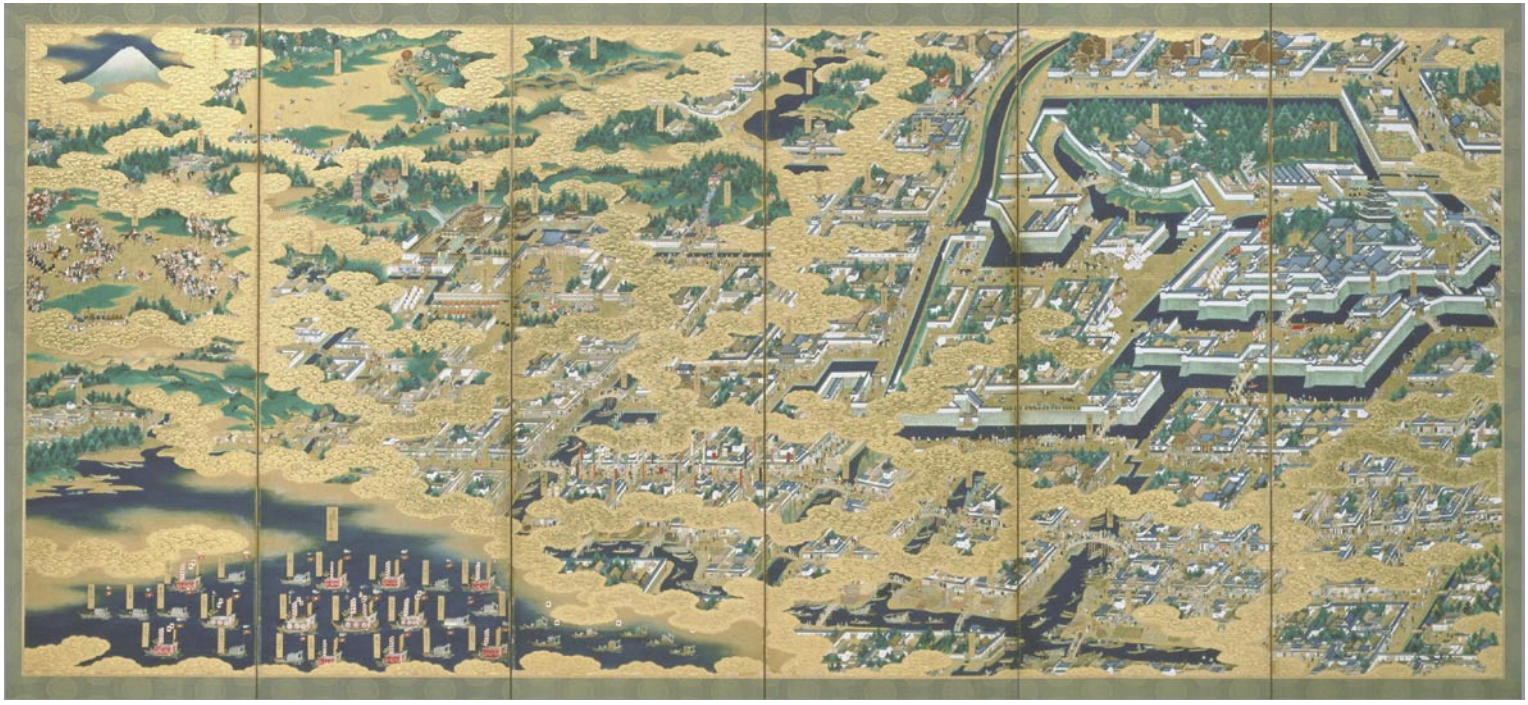


江戸図屏風

国立歴史博物館（千葉県佐倉市）に所蔵されている「江戸図屏風」は、江戸時代初期の江戸市街および近郊の景観を画題として、そのなかに第三代将軍徳川家光の事蹟を描き込んだ六曲一双の屏風で、数少ない史料の一つとされている。

画面寸法は、片隻162・5×366・0cm

この屏風絵の制作年代にはいくつかの説があるが、江戸時代初期の名所・風俗を画題としていること、将軍家光と思われる、顔をみせない人物の活動が、各所にかかれていることから、家光が将軍だった寛永期（1642～1644）ころと推測されている。より具体的に、当時川越城主となっていた、「知恵伊豆」と呼ばれた松平信綱が、家光の御成りの際につ



左隻：江戸　　右から左へ・縦に４等分

１枚目上段：江戸城北ノ丸、御花畠、紅葉山 / 中段上：本丸・天守・梅林坂、平川口御門 / 中段下：三ノ丸、神田、町屋 / 下段：両国、浜町
２枚目上段：西ノ丸・吹上、御三家上屋敷 / 中段上：西ノ丸・三ノ丸、御馬屋 / 中段下：大手門、和田倉橋、大名小路 / 下段：日本橋、高札場、小綱町、町屋、下町の河岸
３枚目上段：溜池、日吉山王社と門前の物売り / 中段上：外桜田、外桜田門、大名屋敷 / 中段下：京橋、日比谷門 / 下段：材木町、下町の河岸
４枚目上段：愛宕、目黒、目黒不動、愛宕山権現社 / 中段上：芝増上寺、東照大権現宮 / 中段下：京橋、新橋、御成橋 / 下段：八丁堀、築地
５枚目上段：目黒、増上寺 / 中段上：芝増上寺、家光御仏殿へ御参詣之所 / 中段下：芝、日比谷町 / 下段：江戸湊候所
６枚目上段：池上、富士山遠景、本門寺 / 中段上：碑文谷、桧物屋（碑文谷）、御鞭打 / 中段下：品川、品川宿 / 下段：江戸湊、武者船

くったもの、とする説が有力である。

見所として、先ず「日本橋」に注目したい。経済の中心地としての町の賑わいが鮮やかに描かれていて、大店が軒をつらね、水陸交通の中心と多くの人々が行き交い、米や材木などの物資が集散されている様子、橋の下を通り抜ける屋形船、橋のたもとには魚河岸があり、船から荷を下ろす様子、幕府の重要な法令を掲示した高札場と、それを見つめる人々、江戸の中心としての活気に満ちた賑わいが描かれている。

右隻：川越　　右から左へ・縦に４等分

１枚目上段：州渡谷、御猪狩、狩りの御仮屋 / 中段上：須戸野谷 / 中段下：鴻巣御殿 / 下段：鴻巣宿、中山道、元荒川
２枚目上段：川越御川狩、御仮屋、川越御城 / 中段上：御城 / 中段下：荒川、板橋宿 / 下段：中山道、武家の行列
３枚目上段：御城、三芳野天神 / 中段上：御城、御鞭打 / 中段下：谷中、板橋、鹿の群れ / 下段：王子、隅田川、中山道
４枚目上段：巣鴨、川越街道、鴻巣鷹狩 / 中段上：谷中 / 中段下：上野、寛永寺、善光寺 / 下段：浅草、浅草寺、隅田川の渡し
５枚目上段：雑司ヶ谷、鬼子母神、御猪狩、伝通院 / 中段上：本郷、神田明神 / 中段下：湯島、湯島天神、東照大権現宮、不忍池 / 下段：浅草、隅田川、浅草御蔵
６枚目上段：小石川、駿河台、神田川 / 中段上：神田、神田川、水道橋、吉祥寺、高林寺御茶水 / 中段下：神田、神田筋違橋 / 下段：蔵前、両国、浅草橋

志木市本町通りのほぼ中央、これと交叉する「江戸道」「昭和新道」に囲まれた『仲町』（現・本町1、3、4丁目）の町内会では、居住している地域のことをもっと良く知りたい、また古からの歴史を繙き、資料を集めて記録に残しておきたいとの要望に沿って、このたび多数の貴重な古写真を含む記録集「仲町の歴史」が制作された。
お許しを得て、ここにその内容を貴重な古写真とともに紹介したい。

志木市仲町町内会で制作した

仲町の歴史

はじめに

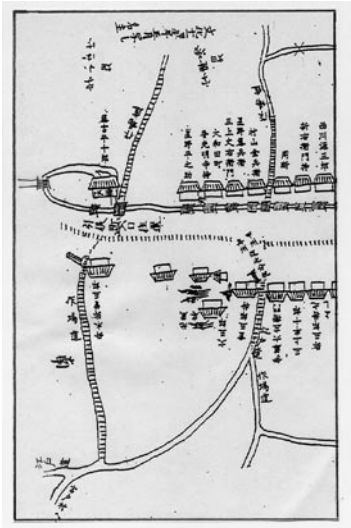
近年「無縁社会」などと言われるように地域社会が疎遠になってきていますが、一方大地震や異常気象による大災害が発生したとき一番頼りになるのは隣り近所です。いざという時に助け合える地域社会を作るための一助となるよう、仲町町内会では昨年、人生の大先輩から昔の話を聞かせていただく懇談会を行い、小冊子「仲町の歴史」にまとめました。

仲町地区の集まり

志木市の柳瀬川・新河岸川沿いの武蔵野台地からは、なんと3万年程前の旧石器や1万年以上前の縄文時代初期の土器が出土しており、太古の昔以来ずうっと人が住んでいた。

中世（鎌倉～室町時代）になると、鎌倉街道に沿った現在の柏町・上宗岡地区に集落が発達した。江戸時代になると引又地区（現在の本町）が発展し、奥州街道の「宿場」となり、新河岸川舟運の「河岸場」もでき、さらに「市場」には月に6回立つ三八の市（明治時代になると二七の市）も立ち、江戸時代中期からは交通・物流の一大拠点となり、志木地域に留まらず、広く周辺地域の経済・商業の中心地となった。

江戸時代後期の仲町地区は、「文化11年（1814）に模写された引又宿古絵図」（志木市指定文化財）によると引又宿の村はずれに位置し、村山金兵衛（富士屋）、地蔵庵（西川地蔵）、鈴木弥



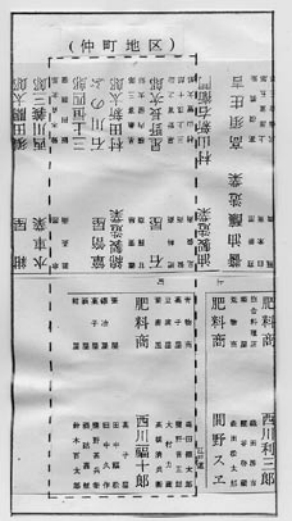
文化11年（1814）に模写された引又宿古絵図
（志木市指定文化財）

曽五郎（百紺屋）などが記され、さらに現在本町3丁目交差点にあるモニュメントの「水車」が描かれている。

明治～大正時代の志木町と仲町

明治7年（1874）引又宿と館村が合併して志木宿が生まれ、明治22年志木宿が志木町に改称された。廻船問屋、米穀商、肥料商、酒造業者、水車屋、呉服屋、旅籠などが軒を連ね、東京～川越間で最大の商業都市だった。明治30年には第八十五国立銀行志木支店（現・埼玉りそな銀行）が開業した。

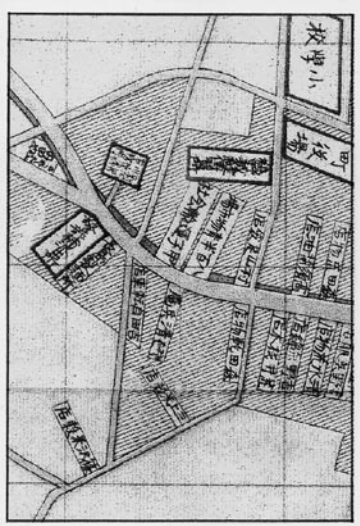
明治35年発行の『埼玉県営業便覧』で仲町地区を見ると、本町通りには家々が立ち並び、現在も続いているお店やお宅が散見される。大正3年（1914）には東上鉄道が池袋～川越間に開通し、志木駅に蒸気機関車が発着するようになった。これにより仲町は町の中央に



明治35年発行の「埼玉県営業便覧」

位置することとなった。同年、志木町に電気が通り電燈がともった。

大正13年9月東京交通社発行の地図を見ると昭和新道はまだ無く、現在のライオンズマンションから斜めに入る旧道が表記されている。また、江戸道が志木小学校の敷地の真ん中あたりを通っていたことが分かる。現在の角長商店・清兵衛・富士屋や八百半・甲子運輸商会が書かれている。また吉田自転車店も当時は仲町にお店があったことが分かる。さらに、鵜野裁縫伝習所と言う和洋裁を教える私立の女子教育学校があり、細田裁縫女学校（現・細田学園）と競っていたそうだ。



大正13年9月東京交通社発行の地図

昭和初期（昭和元年～20年）の仲町

本町通りの道路は簡易舗装だったが補修が悪く穴ぼこだらけの道だった。道路の西側に

沿って野火止用水が流れていた。道幅も現在の車道部分のみで、商店の商品が道路まで積まれていたので、随分狭かった。しかし、商店が文字通り軒を並べ、買い物客で大いににぎわっていた。

昭和新道の開通

昭和新道は、昭和天皇即位の御大典を記念して行われた工事で、昭和2年に着工し3年に完成した。仲町と宮戸（現在の大原）との間は谷津（＝くぼ地）になっていたので、そこに盛り土して道路を通した。ただし、盛り土は現在より低かったそうだ。この頃、昭和新道の商店には内間木村宮戸方面からも多くのお客が来ていた。（村にはほとんどお店が無かった。）

仲町のはじまりと戦時体制

仲町は上町の一部だったが、昭和15年～16年（1940）頃、上町から分離独立して仲町が生まれた。同時に、双葉町と寿町も上町から分離独立したようだ。

「仲町」の町名は、上町と双葉町の間で町の中央でもあり、さらにみんな仲良く暮らすことも含めて名づけたのではないかと推測されるが、確証は出てこなかった。

同じく昭和15年「大政翼賛会」が結成され、戦時体制に対応するために、町内会・隣組に翼賛会の世話人が置かれた。このことから、上町を分割した意図がきめ細かい戦時体制を確立することにあったように推測される。同じ目的で、「大日本青年団」・「大日本婦人会」なども結成された。

当時、戦費をまかなうための「戦時国債」を買わされた。町内会から隣組に購入金額が強制的に割り付けられた。

昭和19年（1944）2月11日（紀元節の日）、戦時体制上の要請から志木町・内間木村・宗岡村・水谷村が合併し、「志紀町」となった。（昭和23年4月に分裂し、元の「志木町」に戻った。）

昭和 15 ～ 16 年頃、戦時体制整備のために強化された「隣組（仲町第六班隣組）」の記念写真。「町内会として残る最古の写真」と言えるもの。

「仲町町内会旗」制作記念写真
（昭和 17 年1月3日、敷島神社境内）

戦争の爪あと

仲町からも多くの方々が出征し、あるいは、勤労動員で働いた。町内では14名の方が戦死あるいは殉職された。志木地区には、直接的な爆撃は無かったが、B29爆撃機が空になった燃料補助タンクを放出し、秋元肥料店の前の道路に落ちてきた。「時限爆弾だ！」というわさが流れ、近所の人々は防空壕に逃げ込んだ。

昭和20年～30年頃の仲町

戦後は物資が不足し、お米はもちろんのこと、砂糖・メリケン粉・パン・野菜・魚・クスリなど、何でも配給だった。配給を受けるには、通帳や引換え券を持ってゆく必要があり、行列して受け取った。町内には、配給物資を取り扱う商店が沢山あり、現在では想像もつかないほどのにぎわいだった。

昭和30年頃の仲町には、お菓子屋4軒、八百屋2軒、乾物食材店2軒、薬屋2軒、電気屋2軒、洋品店2軒、種苗店2軒、蕎麦料亭・寿司・料亭・喫茶各1軒、酒屋1軒、医院1軒、歯科医1軒、眼科医1軒、助産所2軒、理髪・美容各1軒、本屋1軒、貸し本屋1軒、大工2軒、板金屋2軒、左官屋1軒、鳶職1軒、肥料店1軒、荒物屋1軒、洗濯屋1軒、塗料店1軒、精米屋1軒、自転車店1軒、そろばん塾・学習塾各1軒、おもちゃ屋1軒、鍛冶屋・桶屋・箒屋各1軒、花屋1軒、などが軒を並べていた。

江戸道入り口の「火の見やぐら」の上から見た仲町の町並み。
（「埼玉タイムス」昭和28年5月3日号より）

火の見櫓
「角長」の裏手からの眺め

町内会の復活

占領政策により、町内会・隣組は軍国主義を支えてきた組織として解散させられたが、昭和26年（1951）9月サンフランシスコ平和条約を締結して独立を回復し、町内会の結成が可能になった。志木町では、昭和29年8月に「市場町内会」が結成されたと「埼玉タイムス」（昭和29年8月22日号）の記事に載っているので、仲町町内会もほぼ同じ頃に結成されたものと推測される。

昭和29年から30年にかけて、本町通りが駅前から坂上まで順次舗装された。本町通りの商店街にネオンが付いたのは、昭和29年8月の仲町（13軒）が皮切りで、31年4月には合計105件になり、「ネオン祭」が行われた。（埼玉タイムス 昭和31年3月25日号による。）

拡張される前の昭和新道

区画整理と慶応通り

人口の急増と宅地の乱開発に対応するため、直路地区区画整理事業は昭和30年代前半から検討されてきたが、合意に至らず暗礁に乗り上げてしまった。昭和41年に審議会が設置されて事業が再出発した。その後施工区域の縮小、施工年度の2度にわたる延長、17戸の家屋の移転を経て、昭和46年5月ようやく完成した。

これにより慶応通りが造られ、整然とした宅地が出来た。「直路交通公園」はこの事業によって造られたものである。

昭和47年1月、住居表示変更により「仲町」の表示がなくなり「本町」になった。ただし、町内会は従来どおりの地区割りと「仲町」の呼称が継続された。

仲町に残る文化財など

(1)「イボ取り地蔵」

蕎麦屋「清兵衛」と「ニュータイムス社」の間にある西川本家の墓地の前に「西川地蔵」がある。正徳5年（1715）に建立され「引又地蔵」とか「延命地蔵」とも呼ばれてきたが、皮膚にできるイボを取り除くのに効能があるとして「イボ取り地蔵」とも呼ばれ、親しま

れて来た。明治・大正の頃は毎月４の日に縁日が立ち、道の両側に団子屋、おでん屋、飴屋、おもちゃ屋、雑貨商などの店が沢山立ち並んだと言うが、特に８月14日の縁日には、屋台囃子がかかったり、特設の桟敷で芝居や浪花節も演じられたので、近在近郷の善男善女が殺到し、たいそうな賑わいだったそうだ。（「しき ふるさと史話」より抜粋）

(2)「三つ子稲荷神社」

本町通りの「角長商店」わきの江戸道を約１００ｍほど行った左手の道端に赤い鳥居のお稲荷さんがあるが、これは「正一位三つ子稲荷大明神」の社（やしろ）である。この稲荷は角長商店森田家のもので、先祖長太郎さんが祀（まつ）った社だと言う。嘉永２年長太郎26才のときに店を開き、江戸道の角の長太郎店ということで、いつしか「角長」が屋号として定着した。

イボ取り地蔵にあった木版刷りのお札

商売熱心な長太郎は中山道の板橋宿（現東京板橋）まで商品を仕入れによく行ったが、安政年間（１８５４～５９）のある夏のこと、例によって長太郎が板橋宿に仕入れに行った帰り道、白子（現和光市）の坂で苦痛に耐えている一匹の大狐を発見した。一度は通り過ぎようとしたがただならぬ狐の様子に捨て置くことも出来ず、家につれて帰り水や食べ物を与え寝かせた。翌朝見ると３匹の子狐が生まれていたが、産後の肥立ちと乳の出が悪く、親狐も子狐も共に死んでしまった。狐の死を悼んだ長太郎一家は江戸道わきの所有地に埋めてねんごろに弔い、お墓の上に祠を建て、伏見稲荷の神霊を招いて狐の霊を祀った。三つ子稲荷神社は１５０年たった今も江戸道のほとりに祀られている。（「しき ふるさと史話」より抜粋）

(3) 江戸道

角長商店の角から、ヘアサロン三角の前で昭和新道を横切り、新井種苗店へ抜ける道は江戸道と呼ばれている。この道は江戸時代に川越街道が整備される以前から川越方面と江戸を結ぶ道であった。川越街道が徳川幕府老中兼川越城主松平豆守信綱によって整備されると、裏街道として利用されたようだ。右手に慶応高校のグランドを見ながら直進すると東武東上線にぶつかる。この場所に「馬頭観世音」の石塔が立っており、側面に「江戸道」・「嘉永四年」と刻まれている。この道が「江戸道」と呼ばれていたことを証明するものである。

仲町にあった建物・自然など

仲町は志木町のほぼ中央に位置していたためか、志木町役場・志木町公民館・志木町消防団車庫などの公的施設や金融機関などがあった。

(1)志木町役場

大正13年に建てられた西洋式木造2階建て建築だった。現在の市役所に引っ越す以前、昭和47年5月末まで使われており、現在の市民会館のあたりに建っていた。

(2)志木町公民館

日本は戦争に負け、マッカーサーによる占領政策に基づき、軍事国家ではなく民主主義的文化国家を目指すことになり、日本中の市町村に公民館が建てられた。志木町の公民館は、昭和24年に建設された。

(3)志木八百半青果市場

明治20年（1887）、横内留五郎さんが開設した。発展拡大する東京は大量の農産物を必要としたので、志木町およびその周辺の大和田・鶴瀬・水谷・南畑・宗岡・片山・膝折・

志木町役場

内間木などから農産物を集荷し。東京方面に出荷していた。

(4)川越貯蓄銀行志木支店・志木商工会

現在ファミリーマートになっている場所には、文久元年（1861）本家から分家した三上猪三郎さんが建てた旧家があった。肥料商や味噌製造業などを営んでいたが、昭和10年代には表通りに面したお店の部分を「川越貯蓄銀行志木支店」に貸していた。同行は昭和19年春、戦時政策により埼玉銀行に吸収合併され、業務・事務所が埼玉銀行志木支店に移ったため、その後には一時期、戦時疎開者が住んでいた。昭和30年前後から54年までは「志木商工会」の事務所がここに置かれていた。

(5)川口信用金庫志木支店は、昭和28年仲町に出店したのが始まりである。

(6)権兵衛山

大谷石の崖の上にある目医者さんの駐車場の北側に三上本家の墓地がある。三上本家は、井下田家と並んで新河岸川舟運の廻漕問屋として江戸時代から明治初期まで営業し、酒造

志木町公民館

業も営み有数の大地主であった。この墓地内に三上権兵衛さんの墓石があり、この権兵衛さんに因んで「ごんべ山」と呼ばれるようになったのであろう。

昭和30年代初頭まで、この周辺は熊笹・クヌギ・雑木が生い茂り、ごんべ山の下のクヌギ林は、カブトムシ・クワガタムシの宝庫で、いくらでも捕まえることができた。朝夕はヒグラシゼミの大合唱があり、オオムラサキ・アカタテハ・ルリタテハなど、きれいな蝶も乱舞していた。ヘビも沢山いたし、子ども連れのコジュケイが「チョットコイ、チョットコイ」と鳴き、まだまだ自然が残っていた。昭和30年代になると住宅開発が始まり、ごんべ山もすっかり住宅地に変貌した。

注記：「仲町の歴史」は市内の図書館で閲覧できます。

華やかな装いの　志木市立郷土資料館特別展

五月の武者飾り

昨年五月の展示は好評だった。しかし、今年は東日本大震災の直後なので、目下のところ開催が危ぶまれている。

お問合せは　電話：048・471・0573

端午の節句を祝う「武者人形」が勢揃い。これらは市内の旧家から提供された貴重な逸品ばかり、その豪華さは、ビジターの目を見張らせ、楽しませた。

惜別

染色家・原　梢美さん

朝霞市浜崎、志木市本町の工房で「繭の会」を主宰、多くの門弟を育て、県展の審査委員、朝霞市工芸会の会長をつとめた梢美さんが、昨年九月十三日に亡くなった。

染色の作業は、スケッチにはじまり、素材の織物の特性に対応し、様々なプロセスを経てすすめられ、殆どすべてが手作業である。梢美さんは、京都の伝統的な染色工房を訪ねて古典的な染色技術を学んだ。これを基礎として、多彩な現代感覚の創作を発表してきた。

しばしばインドネシア、インドなどの東南アジア諸国を旅し、かの地の伝統的な技術を視察して、グローバルな視野で作品を制作された。着物、帯など和装用の作品にも、優美な香りが込められ、多彩かつ新鮮な感覚は高い評価を受けた。

遺作の一つ、「メルヘン」と題するろう染は、朝霞市役所のエントランスに飾られて、市民に優しく語りかけている。

梢美さんは志木市本町二丁目原薬局の二代目、林三の長女として、大正十一年一月一日生まれ、「登世」と名付けられた。埼玉師範学校（現・埼玉大学）付属小学校、川越女学校（現・川越女子高）卒、幼い頃から手芸を好み、実践的な修行を経て、染色家として独立した。

墓所は志木市の宝幢寺　戒名「愛染院梢美妙世大姉」

朝霞市役所のエントランス

特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL090（3048）5502
編集部　原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行

INFORMATION

ＮＰＯ市民フォーラムが編集する CREATIVEBOOK 新書判

好評発売中！

新書判２４０ページ・フルカラー
定価　１２６０円（税込）
全国書店で発売中
ネットでも購入できます。

発行：(株) ヒューマン・クリエイティブ
発売：揺籃社
電話：０４２-６２０-２６１６

CREATIVEBOOK 10号
「隅田川を遡る」橋梁物語

空撮写真のほか多彩なカラー写真を添えて隅田川に架かる橋梁と両岸の賑わいを訪ね、江戸時代からの歴史を語る。

CREATIVE BOOK 11号
「山手線は廻る」環状鉄路の誕生

新橋から品川・横浜へ、日本の鉄道建設は明治五年に始まった。半世紀を経て完成した環状の「山手線」は、首都東京の大動脈となる。本書は山手線各駅近傍の地誌を語り、歴史的な変遷を偲びつつ、気ままに読み下せるように編集された物語り。